

武蔵野ふるさと歴史館だより

第8号

新指定の文化財

御殿山遺跡第2地区N地点出土 縄文時代草創期資料



縄文時代草創期土器（個体A）
胴部に厚みのある隆体を施しその上から円管状の模様をつけています。
武蔵野市所蔵



縄文時代草創期土器（個体B）
波状口縁。胴部に複数の円孔があり、推定胴部径から2孔を一对として3単位配されると推察されます。
武蔵野市所蔵



縄文時代草創期石器（打製石斧・尖頭器・搔器・削器・二次加工のある剥片・細石刃様剥片）
武蔵野市所蔵

市内御殿山遺跡より出土した縄文時代草創期資料の土器2個体分、石器16点の一括資料が、令和3年(2021)7月1日に武蔵野市指定文化財となりました。考古資料としては武蔵野八幡宮の蕨手刀⁽¹⁾以来の指定です。

『武蔵野ふるさと歴史館だより 第6号』でも紹介しておりますが、土器（個体B）に付着した炭化物の放射性炭素年代測定結果から、1950年を起点として16,070～15,630年前の間に使用されていた可能性が高く、日本列島出土の年代測定がされている土器の中でも最古級であることが判明しました。縄文時代初期の土器製作技術や、文化の伝播を検証する上でも極めて重要な資料です。

また、共伴する石器は、旧石器時代の石器製作技術がうかがえるもので、土器とともに旧石器時代から縄文時代への移行期の研究資料として貴重なものです。

(武蔵野ふるさと歴史館 文化財指導員 紺野 京)

[註]

(1) 宗教法人武蔵野八幡宮所蔵 非公開 昭和56年(1981)3月23日指定

昭和3年(1928)3月2日境内の地ならし工事のため出土しました。複製資料は武蔵野ふるさと歴史館常設展示室で展示されています。

目次

[新指定の文化財]御殿山遺跡第2地区N地点出土縄文時代草創期資料	1
野田九浦と風景	2
井の頭池における徳川家康のお茶の水	5
境村に残る振武軍の痕跡 - 上納金覚など -	9
[収蔵資料紹介]土偶	12

野田九浦と風景

武蔵野市立吉祥寺美術館 学芸員 滋野 佳美

令和3年(2021)11月2日、武蔵野市ゆかりの日本画家・野田九浦(のだ・きゅうほ、明治12-昭和46年(1879-1971))は没後50年をむかえた。九浦は関東大震災後に吉祥寺東町へ移り住み、亡くなるまで約50年間を過ごした。彼の人品は地域の人びとに親しまれ、旧野田邸跡は現在、吉祥寺東コミュニティセンターとして、面影を残しつつ大切に活用されている。

九浦がモチーフとしたのはおもに人物である。第1回文展⁽¹⁾に出品した《辻説法》(明治40年(1907))は説法をする日蓮と取りまく民衆とを描いた群像画であり、最高位二等賞を得、彼の出世作となった。「自分は元来花鳥山水のようなものは好まない、大抵こうした宗教家とかまたは歴史人物とか、自分の共鳴した題材を描く事が多い、その方が自分の心持に近いような気がするのである」⁽²⁾という言葉のとおり、九浦は画業の最初期から一貫して人物、特に歴史上の人物を彼の主題に据えた。そして、丁寧な考証と確かな描写、誠実な表現内容によって、歴史人物画の名手と称されたのである。

そのため九浦は、歴史人物画の側面からのみ紹介されることが殆どなのだが、実は風景の表現においても特筆すべき点が多い。さらにいえば、その風景表現の素地に見えているものこそ、彼を野田九浦たらしめているのではなかろうか。ここでは少し、武蔵野市が所蔵する作品から、九浦が捉えた〈風景〉に着目してみたい。

九浦が風景を描くとき、視座のおきどころは総じて俯瞰的である。また、画面の構成要素として、必ずといってよいほど人間の姿や建物、家畜などが登場する。あるいは、具体的な事物はなくとも、人間の気配を予感させている。

大阪朝日新聞社で挿絵の仕事をしていた時期の作品、《竹林》と《鶺鴒》(ともに大正4年(1915)頃、対幅 [図1・2]) をみてみよう。《竹林》は雨の景で、枝葉をしならせた竹の向こう側を、蓑を羽織り魚籠を手にしたふたりの漁師が歩いてゆく。《鶺鴒》では、花盛りの合歡木の間から、鶺鴒魚を覗く。どちらも斜め上から見下ろした構図で、縦長の画面が“垣間見る”という意識を強くする。わざわざこの場面を狙って写生したのではなく、通りすがりの風景の



図1《竹林》
大正4年(1915)頃 紙本着色
武蔵野市蔵



図2《鶺鴒》
大正4年(1915)頃 紙本着色
武蔵野市蔵

なかに人間の姿も眼にした、という印象をもたせている。あえての筆はこびであろうが、描線もどこか牧歌的で明るい雰囲気をもたらす。なおこの2作は、制作時期が相前後していることもあって、『阪神名勝図絵』⁽³⁾(大正5年(1916)[図3])におさめられた作品と味わいがよく似ている。

九浦は友人や門人たちと写生旅行によく出かけていたようで、写生帖が多数のこされておき、旅行雑誌などにもたびたび絵や文を寄稿していた。《湯元》(昭和10年(1935)[図4])はおそらく、そうした写生旅行で訪れた箱根の風景であろう。自然環境の力強さはもちろんのこと、眼下の風景に対する九浦の率直な感動や旅の楽しさも伝わり、事象の文脈全体を想像させる風景画である。画面右下に描かれているのは温泉宿であろう。九浦と同行者との会話も聞こえてくるようだ。

《船仕事》(昭和16年(1941)[図5])は、制作年をみれば第二次世界大戦のさなか、日本では船舶の徴用も拡大していた時期である。あらゆることが戦意高揚という目的に繋がられ、画家たちの仕事もまた同様であったわけだが、この作品は、戦局における緊張感や威圧感を伝えるものではないだろう。描かれているのは船の帆をはる場面と思われるが、ピンと張られたワイヤーの直線とうねる波の曲線の対比、船の揺れのために傾いて見える水平線と船の柱とがつくりだす大きな三角形など、構図の面白さが目を引き、絞られた色彩も効果的である。また、対象によって描き分けられた線のみごとし

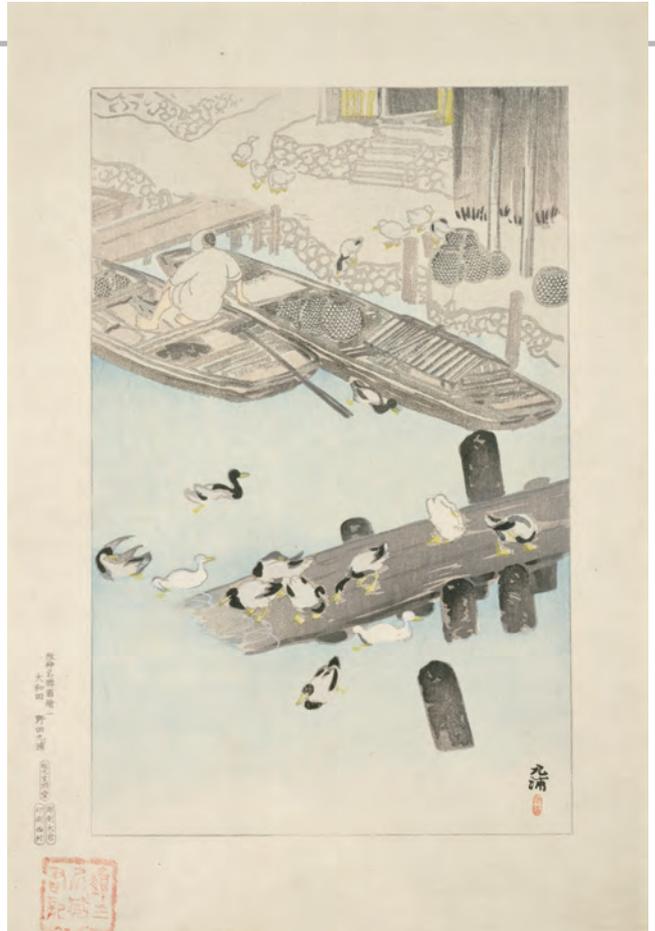


図3《大和田》(『阪神名勝図絵』の内)
大正5年(1916) 木版、紙
武蔵野市蔵

にも驚かされる。九浦が戦時に何を考えていたかは明らかでない。だが本作は、船仕事の一場面を、何らかのメッセージとして用いるのではなく、ひとつの風景に昇華している。彼の思想も自ずと見えてくるのではなかろうか。

《夏の川》(制作年不詳[図6])はおそらく1950年代の作で、ますます円熟した九浦の描写を体感できる。穏やかな川面に、舟上で準備をする鵜飼の漁師と一羽の鵜とが描かれており、一見何気ない写生のようだが、不要なものはすべて削ぎ落



図4《湯元》
昭和10年(1935) 紙本着色
武蔵野市蔵



図5 《船仕事》
昭和16年(1941) 紙本着色
武蔵野市蔵

ら子規に俳句を師事したが、「正岡子規氏の自然主義芸術論をきく中に私の芸術観は、非常に衝撃をうけ、私もそこで考え始めたのである。(中略) 私の芸術観は正岡子規氏の門に親しむ頃から一つの転機をきたした」⁽⁴⁾ といっている。「宇宙は我にあり」⁽⁵⁾と述べた子規から、画家として歩み始めたばかりの九浦が受けとったものは、彼の画業においてまさに至宝であったろう。

九浦は、日本美術院や白馬会洋画研究所で研鑽した経緯はあったものの、彼の選んだ描法は、横山大観や菱田春草らが追究した所謂〈朦朧体〉ではなかった。線を重視した、日本画の伝統に則した描き方であった。彼の描法にもまた、彼の師・寺崎廣業(慶応2-大正8年(1866-1919))の影響はもとより子規の自然主義が深く根ざしていると考えられるわけだが、九浦と子規との関わりについては、機会をあらためて詳しく述べたいと思う。

最後に、先ごろ宮崎県立美術館で開催された展覧会「皇室と宮崎 ～宮内庁三の丸尚蔵館収蔵作品から～」⁽⁶⁾に出展された九浦作品についても記しておきたい。この展覧会において初公開となった《日向御聖蹟絵巻》(昭和11年(1936)頃)は、秩父宮殿下に同行して宮崎を巡った折のスケッチをもとに数年の歳月をかけて完成したという絵巻であり、全3巻から成る⁽⁷⁾。絵巻という体裁ではあるが、客観的視点からの描写というより、九浦がひとり人間として実直にとらえた、あたたかみを感じる作画内容である。また同じく出展作品の風景画《高千穂》⁽⁸⁾(大正13年(1924))、《瑞彩》⁽⁹⁾の内)も、彼がこの地で感得



図6 《夏の川》
制作年不詳 絹本着色
武蔵野市蔵

した崇高な精神性を伝えるが、家々が穏やかな情趣で描きこまれており、人間の営為との断絶は感じさせない。幸運にもこれら貴重な作品群との対面が叶い、あらためて感じ入ったのは、歴史人物画という尺のみでははかり切れない、日本画家・野田九浦の魅力であった。

ともあれ、実物と対面してこそ、である。吉祥寺美術館での九浦作品展観の機会には、ぜひ作品とじっくり向きあい、彼が画面のうえに遺しているものを直に受けとっていただきたい。

【註】

- (1) 第1回文部省美術展覧会の審査員は川端玉章、橋本雅邦、下村観山、寺崎廣業ほか。九浦は二等賞第二席であった。なお一等賞は以降の回も該当が無く、第10回からは「推選」が設けられた。九浦はその後も褒状など複数回受賞。
- (2) 吉岡班嶺編『帝国絵画宝典本文之部一名文展出品秘訣』（帝国絵画協会、1918年）p.73
- (3) 阪神電気鉄道の開通（1905年）によって沿線の宅地開発が進んだが、そのころの大阪～神戸間の景観を、野田九浦、赤松麟作、永井瓢斎、幡恒春、水島爾保布の5作家が6景ずつ描いたもの。1906年に大阪朝日新聞紙上に連載されたのち、翌年に金尾文淵堂から彩色木版画シリーズとして出版された。版の彫刻は大倉半兵衛、摺りは西村熊吉。
- (4) 『美術殿』第8巻第6号（豊國社、1940年）p.22
- (5) 「松蘿玉液抄」（『ちくま日本文学040 正岡子規』筑摩書房、2009年、p.123）
- (6) 会期2021年10月9日～12月5日。宮崎県立美術館公式HP(<https://www.miyazaki-archive.jp/bijutsu/>)参照
- (7) 『皇室と宮崎～宮内庁三の丸尚蔵館収蔵作品から～』展覧会図録（宮内庁三の丸尚蔵館、2021年）pp.14-17参照
- (8) 九浦は宮崎へ複数回旅行しているが、高千穂は特に印象的であったようだ。「高貴の御方に随行して」訪ねた際の感想としても「感のことに深かったのは、日向の高千穂であった」と述べている。註(4) p.20
- (9) 日本画家73名が様々な画題で描いた画帖で、皇太子殿下御成婚を祝し、東京府が献上したもの。註(7) p.4参照

井の頭池における徳川家康のお茶の水

武蔵野ふるさと歴史館 学芸員 米崎 清実

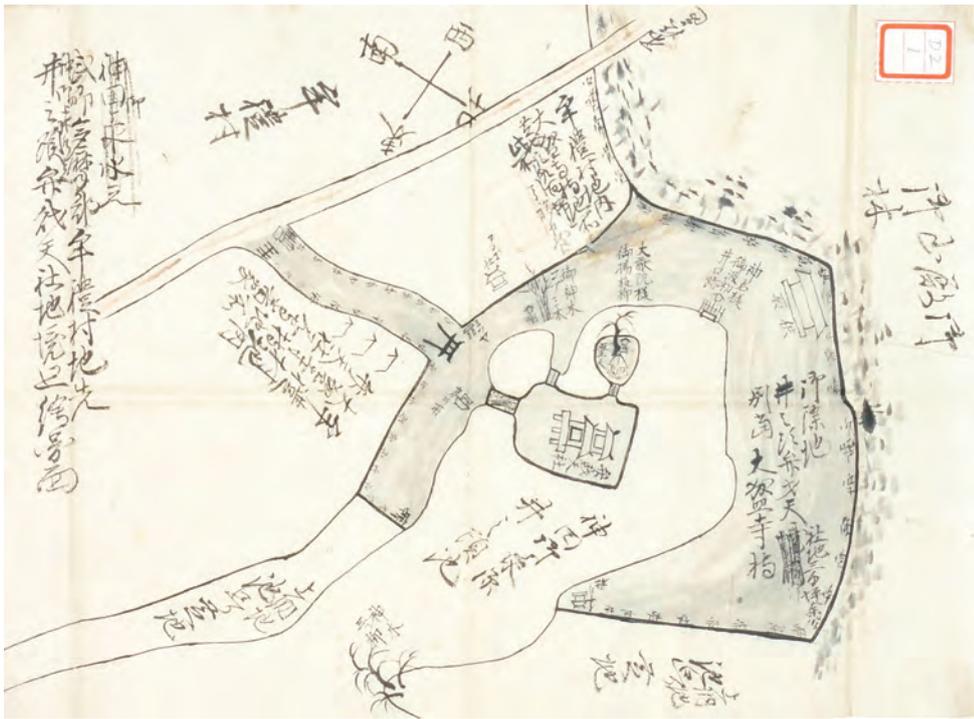
武蔵野市と三鷹市にまたがる都立井の頭恩賜公園は、緑豊かな郊外公園の一つとして多くの人から親しまれている。公園内には井の頭弁財天社があり、その歴史は古い。井の頭弁財天社の境内やその周辺には、現在も奉納された石造物などがあり、なかには江戸時代中期にまでさかのぼることができるものもある⁽¹⁾。井の頭弁



現在の「お茶の水」

財天社に多くの人々が訪れるようになったのは、江戸時代後期に江戸の文人たちによる地誌や紀行文、浮世絵に取り上げられ、江戸周辺の名所の一つとなってからと見られる。

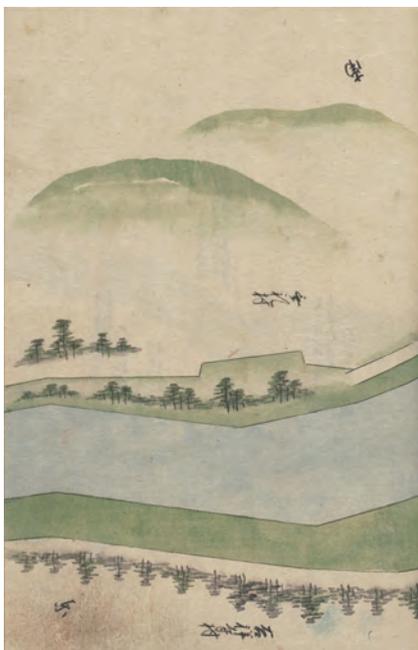
『神田御上水井之頭辨財天縁記』⁽²⁾には、井の頭弁財天社が源頼朝により建立されたことや徳川家康が井の頭池の水を称賛してお茶の水に用いたこと、徳川家光が辛夷に「井之頭」と彫ったことから井の頭と称するようになったこと、井の頭池の水が江戸の上水道（神田上水）に用いられるようになったことや寛永年間（1624–1644）に池水が涸れた際に、天海僧正の加持



武州多摩郡牟礼村地先神田御上水
水元井之頭弁財天社地境廻絵図面
個人所蔵
画像提供：三鷹市教育委員会

により再び水が湧出したことなどが記されている。江戸時代後期の地誌や紀行文には、池水の清冽さと合わせて、多少の相違が見られるものの井の頭弁財天社の縁起と同様の源頼朝や徳川将軍の故事が紹介されている⁽³⁾。

そして、徳川将軍の故事は現在まで引き継がれ、その跡が残されている。徳川家光が「井之頭」と彫った辛夷の木跡には明治26年(1893)3月に建てられた辛夷の碑が建てられている。また、井の頭池の水を徳川家康がお茶の水に用いた説明とともに、「お茶の水」として石製の井桁が設けられ、地下水をポンプによりくみあ



上水記
東京都水道歴史館所蔵

上水記 部分



げて水が湧出している情景が再現されている。しかし、徳川家康がお茶の水を汲んだとされる故事を示す場所は、現在と江戸時代と異なることを知らない人が多い。

年月日の記されていない「武州多摩郡牟礼村地先神田御上水水元井之頭弁財天社地境廻絵図面」⁽⁴⁾は、寛保3年(1743)2月21日付けの裁許状が残されている牟礼村の大盛寺が吉祥寺村の農民を訴え出た一件に関連する絵図と見られる。この絵図には「御神木コブシ木」と「大猷院様御楊枝柳」「神君様御汲初井口跡」が描かれている。いずれも「御除地井之頭弁才天境内別当大盛寺持」という社地で、「コブシ木」は弁財天社に向い左側、「楊枝柳」は弁財天社と橋を通じてつながっている聖天社の脇、「井口跡」は「コブシ木」から北の方にめぐった池辺にあることがわかる。

次に、江戸時代後期に作成された『上水記』の絵図と『江戸名所図会』の挿画から、徳川将軍に関わる場所を確認しよう。

寛政3年(1791)に江戸幕府の普請奉行上水方道方の石野遠江守広通が著わした『上水記』⁽⁵⁾には、徳川家康がお茶の水を汲んだ「井口」、徳川家光が「井之頭」と彫った「辛夷の木」、徳川家光がさした「柳の古樹」、それぞれの「建札」の文言が記されている。また、井の頭池の絵図には、「建札」の位置が描かれている。それによると、辛夷の木の「建札」はほぼ現在の辛夷の碑のあたりにある。現在は目印となるものが作られていない柳は井の頭弁財天社の正面に向いすぐ左の池辺にある。徳川家康がお茶の水を汲んだ場所には井桁が設えられ、その井桁の横に「建札」が見える。

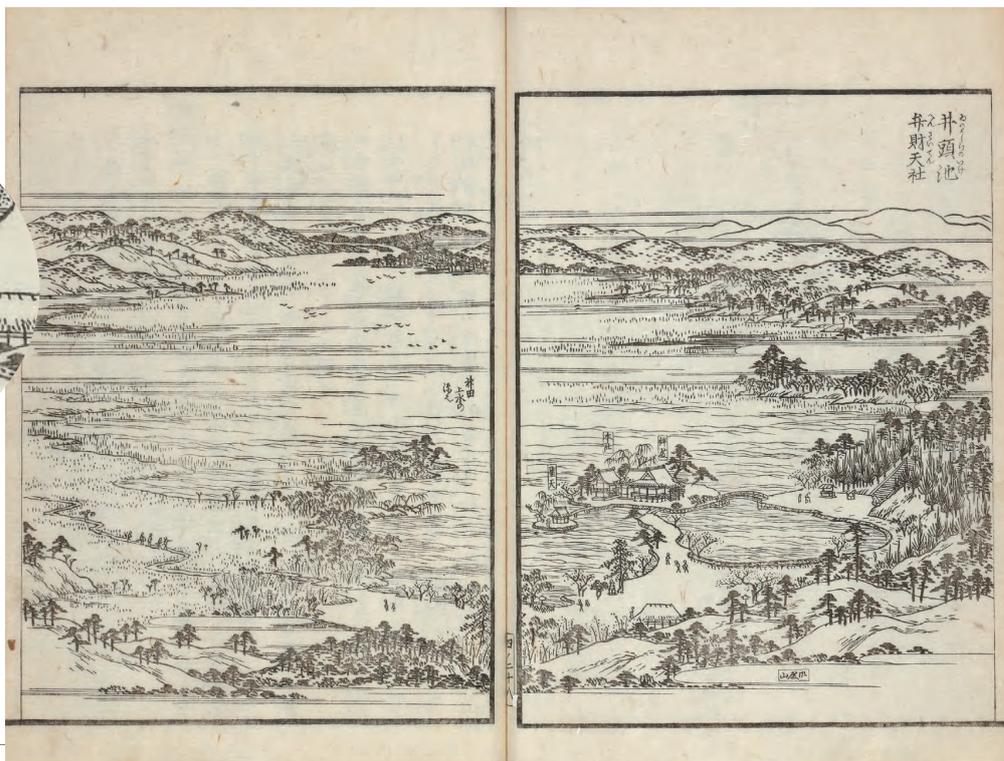
江戸府内及び江戸近郊の名所の情景が、長谷川雪旦により詳しく描かれている『江戸名所図会』⁽⁶⁾の挿画も見てみよう。画中の下の方、御殿山の麓に建物が描かれている。その建物の左右に立札があるのがわかる。向かって右側が家光の柳だろう。そして、建物の左側の池辺にある立札は、徳川家康がお茶の水を汲んだ井戸を表す立札だろう。『江戸名所図会』の画も『上水記』に描かれる立札の位置とほぼ一致する。

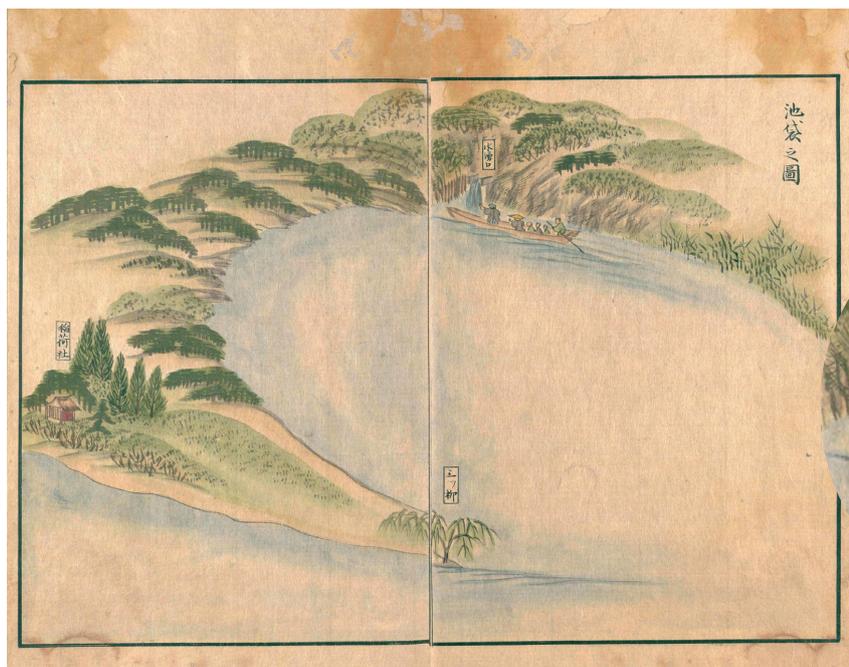
「井之頭弁財天社地境廻絵図面」、『上水記』の絵図や『江戸名所図会』の挿画に見える徳川将軍の旧跡は、いずれもほぼ同じ位置で、井の頭弁財天の周囲の社地内に配置されていることがわかる。井の頭弁財天社にとっては徳川将軍の権威により価値が増すとともに、井の頭弁財天社への参詣者にとっては、徳川将軍の旧跡をたどり楽しむことができるよう、アミューズメントパークのような配置ではあるまいか。そして、絵図や地誌に描かれた徳川家康が井の頭池の水を汲んだことを説明する井桁の場所は、現在と異なるのである。



江戸名所図会 部分

江戸名所図会
武蔵野ふるさと歴史館所蔵





井の頭記行

国立国会図書館デジタルコレクション



井の頭記行 部分

井の頭池には西側に二つの入江があり、ハートの形を西側を上にも横倒したような形をしている。現在の徳川家康の「お茶の水」は、西側入江のうちの北側入江の西端に作られている。これは、井の頭恩賜公園が大正6年(1917)に日本初の郊外公園として開設された際に現在の場所に造成されたもので、数々の公園を設計し、東京都の公園行政に尽力した井下清が場所の選定と造作の設計をしたものである⁽⁷⁾。では、何故現在の場所に井桁が造成されたのだろうか。『井の頭記行』は天保7年(1836)、江戸幕府普請奉行土岐頼旨が、神田上水の水源地の状況を確認するために、江戸から井の頭池まで赴いた際の紀行文である⁽⁸⁾。その挿画の一つ「池袋之図」には、ちょうど現在の井桁のある付近の井の頭池西側の崖線に「水湧口」として樋のような部分から水が豊富に流れ出し、その場所を船に乗って検分している土岐頼旨一行が描かれているのである。

井の頭恩賜公園は、「歴史と風致保存活用」を考慮されて整備された⁽⁹⁾。しかし、その際、徳川家康のお茶の水は、かつてあった井の頭弁財天の社地内ではなく、水が湧出する場所が選ばれ、移設されたと見ることができる。このことは単なる場所の移動に留まらず、徳川家康のお茶の水が井の頭弁財天から切り離され、公園を楽しむ市民が共有する歴史的遺産へと転換したと考えることができよう。

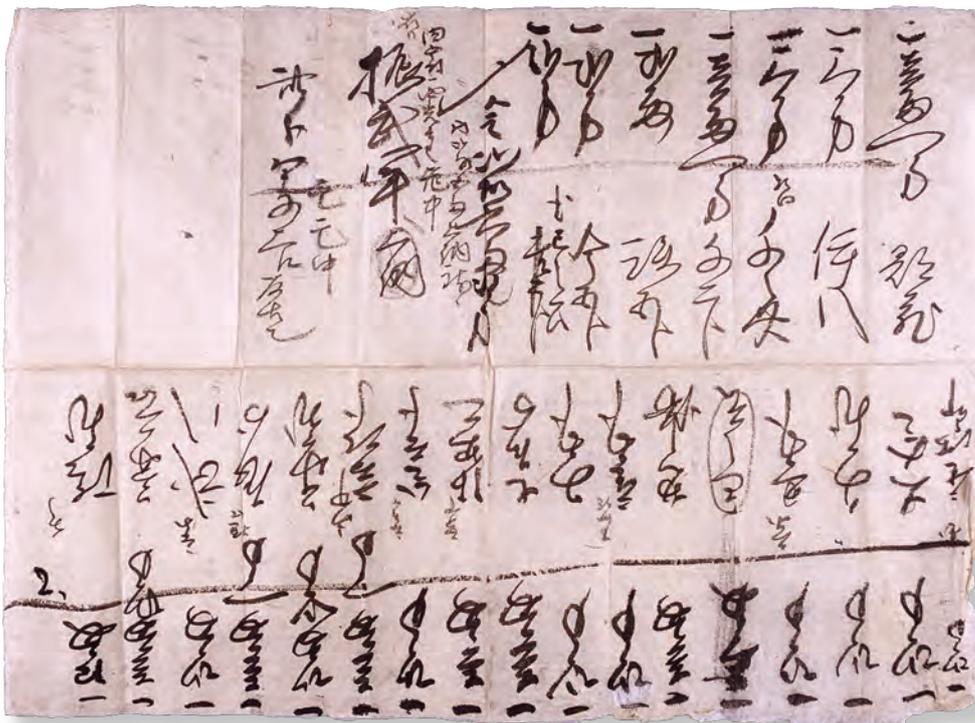
[註]

- (1) 井の頭弁財天社地やその周辺の石造物については三鷹市教育委員会により調査が行われ、『みたかの石造物』(三鷹市教育委員会、1996年3月)としてまとめられている。
- (2) 近世村落史研究会編『三鷹市史資料集 第三集』(三鷹市教育委員会、1972年2月)
- (3) 馬場憲一「近世都市周辺の宗教施設の由緒と「名所」化の動向—江戸近郊の「井の頭弁財天社」と「井の頭池」を事例として—」(法政大学『多摩論集』第36号、2020年3月)によると、井の頭池と弁財天社の名所化には、「伝承的由緒と自然環境を備えた景勝地」が重要な要素だったことを明らかにしている。
- (4) 個人所蔵。画像は三鷹市教育委員会より提供を受けた。
- (5) 東京都水道歴史館所蔵。画像は東京都水道歴史館より提供を受け、利用にあたり東京都水道歴史館 金子智氏・河合洋介氏の協力を得た。
- (6) 武蔵野ふるさと歴史館所蔵。
- (7) 『井下清生誕130周年記念／東京都公園協会設立60周年記念「井下清と東京の公園 緑に生涯をかけた彼の哲学」』(公益財団法人東京都公園協会、2014年1月)には、井の頭恩賜公園を計画する際、井下清が描いた徳川家康のお茶の水の意匠が掲載されている。本資料については当館学芸員木村遊氏のご教示を得た。
- (8) 国立国会図書館所蔵。画像は国立国会図書館ウェブサイトより。
- (9) (7)と同じ。

境村に残る振武軍の痕跡 – 上納金覚など –

武蔵野ふるさと歴史館 林 明日子

大河ドラマ『青天を衝け』では、渋沢成一郎（喜作）・尾高新五郎（惇忠）らが率いる振武軍が、新政府軍に抵抗して戦う姿が描かれた。彼らは、現・武蔵野市域を始めとする多摩の村々にも様々な痕跡を残している。境新田（現・武蔵野市）の平野家文書には、境村から振武軍への上納金についての書付が存在する [写真1]。



慶応4年(1868)正月の鳥羽伏見の戦以降、新政府軍に恭順の姿勢を示す旧幕府首脳陣に反発した抗戦派の旧幕臣たちは、それぞれ江戸から脱走し抵抗を続けた。上野・寛永寺にとどまっていた彰義隊の頭取であった渋沢は、やがて副頭取の天野八郎と決裂し脱退、5月初めに青梅街道沿いの田無村・西光寺（現・西東京市総持寺）などに屯集し、新たに振武軍を結成した⁽¹⁾。そして軍用金の調達を試みられ、5月2日には田無村組

写真1 振武軍への上納金覚

23名の名前が記されており、巳之吉には抹消線が引かれ、リスト末尾の吉五郎と入替えられている。最後に「此分写上ル、反古也」と記され、全体に抹消線が引かれている。
武蔵野市所蔵 平野家文書

合⁽²⁾の大惣代であった田無村名主・下田半兵衛から周囲の村々へ「此状披見次第、名主自身御印形御持参、即刻御出張可被成候」との廻状が発せられた[写真2]⁽³⁾。その廻状は田無村組合内にとどまらず、所沢・拝島・扇町屋・日野・府中や布田の各改革組合村にも達しており、呼び出された村役人たちは振武軍からそれぞれ軍用金の提供を要求されている⁽⁴⁾。表題の書付は日付を欠くが、この折に作成されたものと考えられ、書面によると境村は集めた金額の内、合わせて25両を上納している。境村や関前村を含む40ヶ村で構成されていた田無村組合全体では、730両の上納金が集まったとのことなので⁽⁵⁾、組合全体に占める石高の割合(2.6%)⁽⁶⁾からするとやや高額な負担である。上納金に対する振武軍からの受取書や感状が残っている村も見られるが⁽⁷⁾、残念ながら境村では確認されていない。

写真2 『むさ志野の涙』(複写)

内藤新田（現・国分寺市）神山平左衛門が明治18年(1885)に記したもので、「辰五月二日」部分。欄外に「金策ニ甚々迷惑致し候」との記述がある。『武蔵野市史 続資料編一』（武蔵野市役所、1968年）に翻刻が掲載されている。
武蔵国分寺跡資料館所蔵

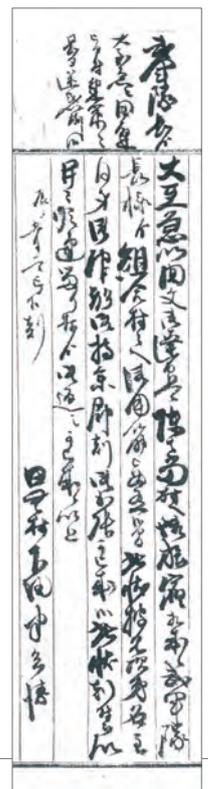


表1 振武軍上納金支払者一覧

持高 村内 順位	本村・新田	名前	年齢(数え)		持高合計 (石)	五人組 組頭	上納金額	
			文久3年	慶応4年			両	分
2	本村	清蔵	65	70	23.835	●	4	
3	新田	千二郎(仙次郎)	75	80	23.662	●	1	1
4	新田	鉄五郎	65	70	20.775	●	2	
5	本村	金太郎	20	25	17.803	●		2
6	本村	武八	56	61	16.213	●	2	
7	新田	千之介(仙之助)	71	76	12.960			3
8	本村	惣兵衛	71	76	12.207		1	
9	本村	七左衛門	32	37	11.501		1	
10	本村	弥惣二(弥惣次)	60	65	10.760		1	
11	新田	巳之吉	55	60	10.581			2
12	本村	又五郎(又次郎)	54	59	9.596			2
14	本村	米蔵	55	60	8.596		2	2
17	本村	兼吉	49	54	7.925		1	2
18	新田	今五郎	29	34	7.792			2
20	本村	伊八	47	52	7.228			3
23	本村	丑五郎	63	68	6.592	●		2
24	本村	郡蔵(軍蔵)	31	36	6.279	●	1	1
25	本村	文蔵	71	76	6.055			2
32	本村	辰右衛門	60	65	4.800	○	1	1
33	本村	音次郎	43	48	4.545	○	1	1
44	本村	重次郎	45	50	3.115	●		2
		重五郎(万助跡)				●		2
		大金						2
						18	32	
合計(両)：						26		

※1両=4分

各戸の情報は「文久三年三月 宗門人別書上帳 境村・同新田」(『武蔵野市史 続資料編十三 境・秋本家文書四』124 -170頁)、「慶応四年三月 御法度五人組連印一札」(『武蔵野市史 続資料編十一 境秋本家文書二』383-384頁)より作成。(重五郎・大金 は宗門人別書上帳に記載無し。)
※慶応4年の年齢は推定。同名で代替わりしている可能性も有り。

五人組組頭の「○」は漢字表記が違うがおそらく同人と思われる。
(大金は、他の書付にも頻出する「*金五郎」か?)

両2分508文を筆頭として桁違いに多い⁽¹¹⁾。

振武軍への上納金については、他にも拝島村組合の中藤村(現・武蔵村山市)に「振賦隊御用金出金連名帳」という村内での割り振りがわかる資料が残されている。拝島村組合全体では500両を上納し、中藤村では「村役人一同重立候百姓立合之上」、他の入用分も含め28両3分436文を出金しているが、石高が組合内で8.5%を占めていた割に負担は軽めであった。内訳では持高1石につき永44文4分掛で、46名で28両3分3朱を集めているが、実際の集金は騒動から約半年後の11月~12月にかけてであり、取りまとめて名主・源蔵に渡されている。こちらでも、リストには年寄かと思われる者の名が複数見られるものの、3名いた名主は含まれていないようである⁽¹²⁾。

振武軍はいちど箱根ヶ崎村(現・瑞穂町)方面に移動した後、上野戦争勃発の情報を聞きつけ高円寺付近まで取って返した。しかし5月15日の彰義隊の敗退を受け、敗残兵らと共に再び田無に頓集した後、西へ向かう⁽¹³⁾。境村には5月16日にも、退去する振武軍など諸隊のために、人足

慶応4年当時の境村は本村・新田の2地域、125戸から成っていたが⁽⁸⁾、書付に記載された23名の内、文久3年(1863)の「宗門人別書上帳」⁽⁹⁾でも名前を確認できる者は21名で、内1名は5年の間に代替わりしている。16名が本村、5名が新田に属しており、村内での持高上位の者が大多数で五人組の組頭も多く含まれる。しかし上納した金額は持高に比例しているわけではなく、また持高は上位であってもこの上納金リストには見られない者もあり、どのような基準で23名が選ばれたのかは不明である[表1]。「村入用の負担の度合いはある程度その人達の村落構成員としての比重を反映する」⁽¹⁰⁾とされるが、名主・組頭・年寄・百姓代などの村役人が、そろってこのリストから外れているのも興味深い。後難を恐れてこのような対応になったのかはわからないが、対して翌明治2年(1869)6月の新政府に対する「御上納金割合取立帳」では、持高に関係なく村役人を含むほぼ全戸に上納金が割り振られており、上納金額も境新田組頭・佐七の16

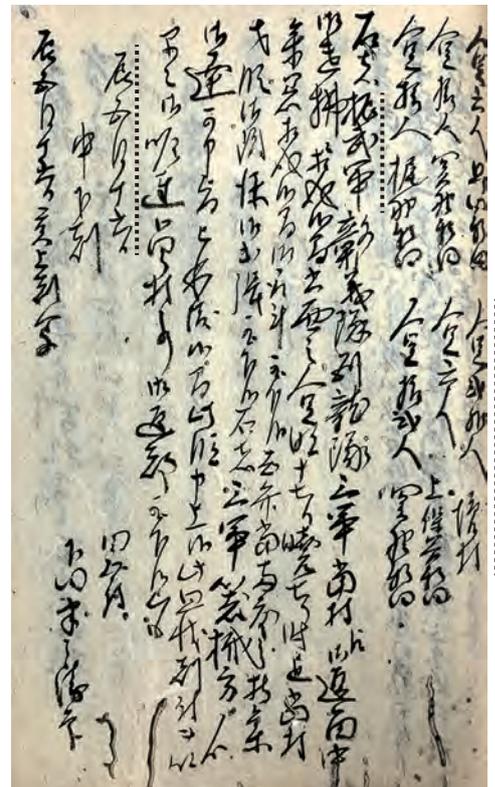


写真3 慶応2年11月 御用留
「辰五月十六日」部分。
武蔵野市所蔵 秋本家文書



西光寺跡（現・西東京市 総持寺）



振武軍碑（飯能市 能仁寺）

20人を出すようにという下田半兵衛からの廻状が届いている⁽¹⁴⁾[写真3]。慶応4年は年初から新政府軍の往来も多く、村民は甲州街道・府中宿などへの助郷に駆り出され、また米や金子を求められており、境村周辺は両勢力のためにかつてなくあわただしい空気に包まれた様子がかがわれる⁽¹⁵⁾。

なお、田無を離れた振武軍は5月23日、飯能で大村藩・佐土原藩・筑前藩・筑後藩などから成る新政府軍と戦った後、敗走している⁽¹⁶⁾。

[註]

- (1) 『里正日誌 第十巻』東大和市教育委員会、1996年、82-83頁
- (2) 文政10年(1827)、治安維持のため、主に関東地方で幕領・私領・寺社領の区別なく改革組合（寄場組合）が設定された。現・武蔵野地域の境村と関前村は田無村組合、吉祥寺村と西窪村は布田村組合に属していた。
- (3) 『武蔵野市史 続資料編一』武蔵野市役所、1968年、216-217頁
『里正日誌 第十巻』東大和市教育委員会、1996年、82頁 など。文言はそれぞれ少しずつ相違している。
- (4) 同上、86頁
『多摩市史 資料編 三 近代』多摩市、1996年、8-11頁
『調布の近世史料 上』（調布市研究資料VI）調布市、1987年、86-87頁 など。
- (5) 『里正日誌 第十巻』東大和市教育委員会、1996年、86頁
- (6) 大石慎三郎『近世村落の構造と家制度 増補版』お茶の水書房、1976年、464-467頁 より算出。
- (7) 『小平市史概要版 小平の歴史』小平市、2015年、167頁
『調布の近世史料 上』（調布市研究資料VI）調布市、1987年、88頁 など。
- (8) 『武蔵野市史 続資料編十 境・秋本家文書一』武蔵野市、2005年、497-498頁
- (9) 境村の宗門人別書上帳については拙稿「境村の人々 - 宗門人別書上帳・人別送状などより -」（『武蔵野ふるさと歴史館だより 第6号』2020年、12-15頁）を参照。
- (10) 大石慎三郎『近世村落の構造と家制度 増補版』お茶の水書房、1976年、178頁
- (11) 『武蔵野市史 続資料編十三 境・秋本家文書四』武蔵野市、2012年、1-4頁
- (12) 『武蔵村山市史 資料編 近代・現代』武蔵村山市、2001年、17-20頁
- (13) 『里正日誌 第十巻』東大和市教育委員会、1996年、86-87頁
- (14) 『武蔵野市史 続資料編十一 境・秋本家文書二』武蔵野市、2007年、99-100頁
- (15) 同上、92-100頁
- (16) 『里正日誌 第十巻』東大和市教育委員会、1996年、86-87頁
『田無市史 第一巻 中世・近世資料編』田無市、1991年、935-936頁

[参考文献]

- 宮間純一「江戸周辺地域における内乱と民衆」（『戊辰戦争の新視点 下 軍事・民衆』吉川弘文館、2018年）
 松尾正人「多摩の戊辰戦争 - 仁義隊を中心に -」（『近代日本の形成と地域社会 多摩の政治と文化』岩田書院、2006年）
 『特別展 飯能戦争 飯能炎上 - 明治維新・激動の六日間 -』飯能市立博物館、2011年
 工野正樹『振武軍と御抱組 - 田無と飯能ですれ違った二つの旧幕府方武装集団とその後 -』2020年

収蔵資料紹介



土偶

武蔵野ふるさと歴史館 文化財指導員 紺野 京



御殿山遺跡第1地区D地点出土 縄文時代中期前半 土偶

土偶は縄文時代草創期に出現し、晩期までの長期間存在している。北海道から九州まで分布が見られるが、東日本に多く分布する。一般的には安産祈願や豊穡を願った地母神信仰との関連が指摘されるが、作られた目的や用途についてははっきりしない。完全な形を残す土

偶は稀で、壊された(壊れた)状態で体の一部ないしは、いくつかの部位が欠損した状態で出土することが多い。

井の頭池遺跡群における土偶の市内出土例は、これまでの調査で2点確認されている。いずれも御殿山遺跡第1地区(東京都指定史跡、都立井の頭恩賜公園内)のD地点、F地点より出土している。三鷹市側においては、丸山A遺跡より縄文時代後期中葉の板状土偶が1点出土している。

今回紹介する土偶は御殿山遺跡第1地区D地点、公園案内所の工事に伴い、昭和61年(1986)に発掘調査で出土した資料である。

調査地点は井の頭池に向かって南東側へ向かって傾斜しており、縄文時代の遺構としては、IIb層⁽¹⁾下部からIII層より早期以前の落とし穴状土坑が2基並行して検出されているほか、土坑が10基、礫群が2基確認されている。

土偶は遺構からの出土ではなく、いわゆる遺物包含層のIIa層より土偶の頭部のみが単独で出土している。

顔面横幅5.6cm、残存高4.7cm、厚さ5.1cm(顎から後頭部まで)、重量78.0gを測る。顔面は横広の楕円形を呈し、顔の輪郭を隆体で囲んでいる。また、眉と鼻梁をつないだ隆体によってハート形を表出し、目と口は先端の尖ったヘラ状工具による刺突により表現されている。側面から見ると、顔をやや上向き加減にし、後頭部は全体に頸部からせり出している。頭頂部に丸く隆体を貼付け円形状にし、中央に径約1.5cm、深さ約1.3cmの孔を穿っている。また、隆体側面部に刻み目文と浅い刺突が施されている。また、この孔の両側面には、頭頂部同様隆体による円形文様が配され、側頭部の稜線の区画によって玉抱三叉文⁽²⁾を表出している。

頸部は横幅約3.4cm、厚さ約1.8cmを測る。後頸部は中央に断面三角形の沈線が一条縦位に施され、その両側に2本平行に先端三角形工具による連続刺突文が施文されている。

これらの施文技法や顔面の特徴から時期は縄文時代中期前半勝坂期と考えられる。勝坂期の土器に見られる印刻風の文様やせり出した後頭部の表現からは中部地方を中心に分布する棚畑型(河童形)土偶の影響が看取される。

この特徴を持つ土偶は、多摩地域の縄文時代遺跡より確認されている。八王子市檜原遺跡、神谷原遺跡、中田遺跡、宇津木台遺跡D地区、稲城市多摩ニュータウン遺跡No.471遺跡、府中市本宿町遺跡などから出土している。

【註】

- (1) 武蔵野台地の立川ローム層基本層序による。II層は縄文時代の遺物包含層、III層はいわゆるソフトローム層で、旧石器時代の火山灰を主体とする堆積層である。
- (2) 玉抱三叉文(たまだきさんさもん) 丸い穴と三つ又状の彫り込みを組み合わせた文様

【参考文献】

- 御殿山遺跡調査会『井の頭池遺跡群 武蔵野市御殿山遺跡第1地区D地点』1987年
『新八王子市史 資料編I』2013年
『新八王子市史 通史編1 原始・古代』2015年
『新府中市史 原始・古代資料編1 考古資料1』2019年



出土状態(南西から)

武蔵野ふるさと歴史館だより 第8号 発行 令和3年(2021)11月30日

〒180-0022 東京都武蔵野市境 5-15-5 Tel 0422-53-1811

[HP] http://www.city.musashino.lg.jp/kurashi_guide/shogaigakushu_koza/rekishikan/

[Facebook] <https://www.facebook.com/musashino.rekishikan/>

[Twitter] https://twitter.com/musashino_reki

[E-mail] rekishikan@city.musashino.lg.jp

●HP



●Facebook



●Twitter



●Instagram

